

# 日本一くらしやすい町づくり その原点は「人権の尊重」……

第15回「益城町人権フェスティバル」が、「益城町から人権の熱と光を」のテーマのもと、1月28日、町文化会館で開催されました。

展示コーナーには、町内の保育所、幼稚園、小学校、中学校、平田女性部、公民館講座の受講生による、人権標語、習字、絵画などの作品が所狭しと展示されました。年齢や学年がかわらず、人権に対する思いを込めた作品に、多くの人たちが見入っていました。開会行事では住永町長のあいさつの



人権に対する思いを込めたステージ発表

あと、人権標語の特選となった4人の小中学生が表彰を受けました。続いて、この日のために練習を重ねてきた各学校の発表がありました。

袴野小は、進路を見つめ今やるべきことを劇にし、「未来のとびらを開くカギは、自分の心の中にある」というメッセージが印象的でした。

広安西小は、くらしを知ることではつながっていけないということを歌や寸劇を交え構成詩にしました。親に対する感謝の気持ちを大きな声でハキハキと述べていました。

木山中は、東日本大地震の復興に取り組む人々の姿とおして、人と人の「絆」の偉大さ、大切さを訴える劇を発表してくれました。

益城中央小は、水俣での現地学習で、正しい知識をもつこと、差別・いじめ・偏見をなくすこと、人の命・健康・環境を大切にすることが大事だとわかり、学んだことを構成劇にしました。

益城中は、差別によって奪われた文字を取り返したことで、生きる喜びを見出した 吉田一子さんの生き方から「学ぶ」ことの大切さを構成詩で発表しました。

津森小は、62年前の日奈久修学旅行での遭難事故を劇にしました。この出来事が起きた11月5日を「命の日」と定め、命の大切さを学んでいるそうです。

飯野小は、人権学習で学んだ「伝えること」の大切さを構成詩にし、自分の気持ちを伝え、相手の気持ちをしっかり考えると、もっと楽しくなれることがわかったそうです。

広安小は、修学旅行や障がいについての学習で学んだことを構成詩にし、平和を築くために自分たちにできること、「みんなで生きる」ということについて考えさせてくれました。

また、平田女性部は、フレッシュユ益城の皆さんと共に手話ダンスを披露し、客席の皆さんの心を和ませてくれました。人権擁護委員会からは、人権啓発活動についての報告がありました。また、全国中学校人権作文コンテスト熊本県大会で優秀賞に輝いた木山中中学校3年、園田倫也のぶのりさんの「僕の姉」という作文の発表もありました。

## 参加した皆さんの感想を 一部紹介します

◆全体的には素晴らしい発表でした。ただし、自分の学校の発表が終わると、子どもも保護者も会場を出て行き残念です。人権フェスタは単なる発表ではなく、他の発表を見るのが最も大切ではないでしょうか。

◆どの発表もすばらしく感激が熱くなりました。純真な子どもたちのがんばりに触れ、心が洗われる思い



人権標語特選の表彰を受ける子どもたち

でした。大人になるにつれ、自分以外のことには気持ちが薄れていっている気がします。子どもたちの発表を見て感じ学んだことを持ち続けるにはどのようなことが必要なかと考えます。今後このフェスティバルに参加したいと思えます。地域の子どもを見守り続けることは大人の責任のように思います。

「益城町人権フェスティバル」は、「人権が尊重され安心して暮らせる、差別のない社会づくり」を目指して、毎年開かれています。

開会で住永町長は「日本一くらしやすい町づくり、その原点は人権の尊重です」とあいさつしました。

日本一くらしやすい町を創っていくのは私たちです。子どもたちだけでなく、私たち大人も人権の大切さについて考え、毎日の身近なところから一人一人を大切にしたら行動を起こしていきたいものです。

益城町教育委員会